

---

watch!

優希

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

watch!

### 【Zマーク】

Z5871Z

### 【作者名】

優希

### 【あらすじ】

妹に彼氏が出来た！

俺はものすごくあせる。いや、シスコンとかじゃなくて。

純粋に心配なんだ、妹の彼氏の命が。

「お兄ちゃん！私、彼氏できたんだ。」

妹は紅茶の入ったカップ片手に笑顔で俺に残酷な言葉を発した。

俺は血の気が引いていくを感じた。

「そ……それ……じ、『冗談だよな…………？』

俺は食べかけのビスケット片手に、無理やり笑つて見せた。引きつ

つてるのが自分でも分かる。

「今日はエイプリルフールじゃないよ、お兄ちゃん！」

笑つてる。でも俺の笑いとは正反対のまばゆいばかりの笑顔だ。

「い、いや……そういう事じゃなくて……。」

「もう！シスコンも大概にしてよね！」

怒らせてしまつたようだ。妹は座つていたソファから勢い良く立ち上がると、ポニーテールを揺らしながらリビングから飛び出していつてしまつた。

妹の飲みかけの紅茶だけが残つた。

「本当に…………そういう事じゃないんだよ…………。」

持つていたビスケットが手をすり抜け床に落ちてゆく。碎けたビスケットを眺めながら途方にくれた。

「そう、俺はシスコンじゃない…………と思つ。純粋に心配なのだ。」

妹の方じゃない。妹の彼氏の命が。

## 1話 発表（後書き）

初めて書いた小説ですので拙いところがあるかもしれません。  
厳しい批判や、誤字脱字など何かありましたら是非ご指摘下さい。  
感想等もいただけると嬉しいです。

「おい、頼むよ田中！お前人脈広いしさ」  
俺は頭を深々と下げてお願いしている。なのに田中は一向に首を縦に振らない！

そして田中は俺に目もくれずに鏡を見ながら前髪のV字バンクを整えながら言う。

「嫌だ。何で俺がお前のシスコンに付き合わなきゃいけないわけ？」  
田中は『面倒くさい』です。お帰り下さい。』といわんばかりの顔をしている。

「シスコンとかじゃないんだって本当に！これは人の命を守るためにあつてだな」

田中は即座に反論してくる。

「なんで妹の彼氏を探るのが人命の話になるんだよ。」

「そ……それはだな、色々と事情が……」

田中はさげすんだような目で俺を見た。周りの人間の視線も痛い……。

「とにかく、これ以上凛ちゃんに干渉しないでやれよ。俺は凛ちゃんの味方だからお前に協力はできない！」

俺はトボトボと屋上に向かった。屋上に行くまでの暗く、じめじめした廊下の空気が俺の「がっかり感」をせりたあおつてくる。

「おお！圭介、どうだつた？」

見覚えのある癖毛の友人を発見すると、俺は少し安心して顔がほころんだ。さらなる安心を求め、友人の下へ走った。

「全滅。凛のヤツ田中にも根回ししてた。」

俺はフェンスにもたれ掛かつて伸びをした。そしておもむろに双眼鏡をカバンから取り出し、凛のいる教室の方を見る。カーテンが閉まっているため、凛の姿は見えなかつた。

海斗は、じろんと横になつて笑つた。

「ハハハ。やつぱりか。凛ちゃん相変わらず抜け目ないねえ。」

俺は凛の正体を知つて、いる数少ないこの幼馴染にも情報収集を手伝つてもらつていたのだ。

「海斗の方もダメだつた？」

海斗は困つたように頭をかいた。

「うん。色んな人にはたつてみたけど、みんな『知らない』か『教えない』のどつちかでさあ。」

俺達は2人揃つてため息をついた。

「そつか……。弱つたな。ビうしたもんか。みんな俺をシスコン認定するしさ。」

俺はフェンスにもたれ掛かつたままズルズルと足を滑らせて最終的に座り込んだ。

空が青い。汗で湿つたシャツに風があたつて涼しい。  
心地よさで俺はほほ元気を取り戻した。

「それは仕方ないよ。圭介、普段から凛ちゃんのこと監視しそぎなんだもん。昼休みに双眼鏡で妹の教室のぞく兄貴なんか普通いねえよ。」

海斗は困つたように笑う。

「だつて中学の時あんなことがあつたんだぜ？もう心配で心配で。あのときのことを思い出して、俺は鳥肌が立つのを感じた。

「気持ちは分かるけどね。とりあえず弁当食おうぜー聞込みに走り回つたから腹減つた。」

俺達はその言葉を合図に弁当を広げた。

「いのままじや 中学の時の惨劇が繰り返されてしまう。なんとか凜の彼氏とコンタクトを取らなくてはいけない。」

俺は卵焼きを口にほお張りながら力強く演説する。

「まあ、それには賛成。彼氏が誰なのかわからないと対策の仕様が無いからね。それに、あの惨劇は出来ればもう見たくない。」

海斗はパンをかじりながら苦笑いした。

「でも、向こうも色々策を巡らせている様だ。人に聞いてもムダなら自分達の足で探すしかないよ。」

海斗はニヤツと笑う。

俺もニヤツと笑つた。

「よし、尾行するか！」

### 3話 尾行

「……尾行つてなんだかワクワクするな。」

俺は小声で、しかし興奮氣味に呟いた。

「ああ、小学生の頃2人で巨乳のお姉さんの後をつけて家を突き止めたこと思い出すな。」

海斗もニヤニヤしながら小声で話す。その声はテンションの高さを物語つた。

俺達は凛から30メートルほど離れたところから凛の様子を伺う。

「しかし、本当に凛ちゃん彼氏と会うのか？」

海斗はちょっと顔をしかめた。

「凛が彼氏と会わない日なんて存在しないさ。中学の時だって毎日毎日毎日彼氏に会いに行つてたんだぜ？ 彼氏が友達と遊びに行く時だつて無理矢理付いていつたし、どうしても会えない日でも彼氏の家にはりついて監視したりさ……」

俺はあるで怪談話でもするような言い方をした。この恐怖を海斗にも分かつてもらおうとしたのだ。

「え？ そんな事までしてたのか。恐ろしいな。」

海斗は恐怖を感じ取ってくれたようだ。俺は満足して少し得意げに笑つた。

「ああ。まさに恐怖だつただろうつな。あ！道曲がる。追うぞー！」

俺達は見失わないように走つた。

角を勢い良く飛び出すと何かがみぞおちに当つ俺はそのまま倒れこんでしまつた。

俺はしばらく何が起きたのか分からず地面に突つ伏していた。下からうめき声が聞こえる。

あれ？ 転んだ割にはどこも痛くないな……

「おい、圭介！ はやく起きてやれ、窒息しちまうだろー。」

海斗の言葉でよつやく「みぞおちに当たった何か」と「俺の下でうめいている何か」が人だとう事に気が付いた。

俺は急いで立ち上がった。

「わっ！ ゴメンゴメン、大丈夫ですか？」

俺の下にいたのはふんわりしたボブヘアの小柄な女の子だった。あんだけ派手にぶつかったのに、女の子に大きな怪我はないようだ。女の子が背負っていた身長に不釣合いな大きなリュックがクッショーンとなり、頭や背中を守ってくれたらしく。

ぶつかった相手に手を差し伸べる。あれ？ 同じ学校の制服だ。それに、この顔どつかで……？

「わあ、飯島さんじゃないか。どうしたの？」「こんな感じで？」

海斗がいち早くこの女の子の正体に気が付いた。

ああそうだ、思い出した。隣のクラスの飯島さんだ。あんまり話したこと無かったから気が付かなかつた。

飯島さんはためらいがちに俺の手を取つて立ち上がつた。

「いや、ちょっと散歩に……岡田君と松島君……。そんなに急いでどうしたの？」

飯島さんは服についた砂を払いながらギリギリ聞き取れるくらいの小さな声で話す。

俺達は顔を見合せた。

最初に海斗が口を開く。

「いや、ちょっと最近体力落ちてたから走り込みをねー。」

その言い訳はちょっと苦しくないか？ でもこには合わせるしか……

「や、そつそうついでにどちらが速いか競争しててさ。それでぶつかっちゃったんだ。」「めんね！」

「やつだ、怪我とかない？大丈夫だった？結構派手に転んでたからや。」

海斗が話をすりかえた！良くやった海斗！

「うふ、とりあえず大丈夫や。それじゃあまた明日ね。走りこみ、頑張つて。」

飯島さんは足早に去っていく。

ああ、妹の姿はどこにも見当たらぬ。

「ダメだつたな。」

俺はため息混じりに呟いた。

「まあ凛ちゃんの事だ。そんなに簡単に探し出せるわけ無いだろ。気長にやがうひ。」

しかし、そんなに悠長にしている時間はないようだ……。

凛の行動がおかしくなっているような気がする。

携帯をいじる頻度も増えてきたようだ。

凛は彼氏からメールの返事が来なくなると、心配になつてそれまでの2倍のメールを送りつけてしまつらし。1通返事しないことに2倍。考えただけで恐ろしい。

まあメールの返信をちゃんとすれば問題ないのだが……つい、忘れてしまふこともあるだろう。

中学の時は最終的に3分に1回程度メールを送りつけていたそつだ。彼氏には悪いが、凛の体力と執念に感心してしまつた。

最近、部屋にこもつてばかりだし……心配だ。  
何をやつしているのだろう……。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5871z/>

---

watch!

2011年12月20日17時54分発行